

## 死をどのように考えてきたのか⑤

おやさと研究所教授  
堀内 みどり Midori Horiuchi

チベット仏教の指導者であり活仏とされるダライ・ラマ 14 世は、死は一般的には「生命の終焉」あるいは「存在の停止」とされるが、仏教は再生、転生の考え方を受け容れて、死を「この生命」「現世」の終わりにすぎないと考えていると語ります。この場合、「死」は衣服を着替えるほどの意味しか持っていません。彼は、輪廻とは「前世によって決定される次の生、次々と引き継がれてゆく生けるものの生命のこと」で、すべての生きるものに起こっている継続して回りつづける“生命の輪”であると説明しています。

## 輪廻転生として生きる

継続して回りつづける“生命の輪”は、すべての生きるものに起こっているとダライ・ラマ 14 世が語っていること、それはひとつの生命のあとに次の生命を生きるということで、そのような仕方では、生命は次々と引き継がれていくと説明されます（ダライ・ラマ『ダライ・ラマ「死の謎」を説く』角川文庫、平成 20 年、56 頁）。チベット仏教やヒンドゥー教では大多数の人々はこの輪廻の考え方をごく自然に受容していて、当たり前のように生きています。今の状況や生かされている環境が必ずしも望ましいものではないとしても、今生きている生き方によって、次の生の状態が期待できるともいえます。なぜなら、私たちの“次の”生は、私たちの“（今までと）今の”生如何にかかっているからです。それはこの連載で以前触れましたように、私たちのこの世、この現象の世界での有り様（行為／業）が輪廻に関わっていると信じられているからです。

輪廻はサンスクリット語のサンサーラに由来し、ぐるぐると経巡ることを意味しています。漢字の輪廻は生命が無限に転生を繰り返すことを車輪の軌跡に喩えたといわれます。仏教では、生けるものは、輪廻によって複数の世界を巡るとされています（六道輪廻、無色界・色界・欲界など）。ダライ・ラマ 14 世は自ら次生を選び取ることも可能であるとして、次のように語っています。

私が考えるに、輪廻転生という特定の用語自体は、自分自身の来世（次生と解すればよいと思います：引用者）での行き先、すなわち生まれ変わる時と場所とを選び取ることができそうな人々、あるいは生きとし生ける存在に対して、そもそも与えられたものだろう。…輪廻転生は個々の到達した内面、もしくは実践の高さによっては、次の生命を自ら選び取ることが可能だということを意味している（同書、58 頁。ただし同書 60 頁では、特定の同じ人間が生まれ変わって活仏として生き継ぐという考え方、活仏の思想はチベット仏教独特のもの、また、高度に精神性が高く実践を重ねた魂は、ひとつの生命がついたからといってまた新たなひとつの肉体が必要というわけではなく、そのような存在はひとつの輪廻から複数の輪廻を同時に実現するとも語る）。

このように、死は生と生とのいわば区切り／一休止のようなものとなっているように思われます。死はひとつの、あるいは固有の肉体をもった生命の終わりではありますが、その生命（あるいは前生などを含めた複数の生）の有り様を引き受けて、また次の生命として引き継がれていきますから、今、どのように

生きているのか、どのような思いでいるのか、どのように行動しているのか等々、生きている私たちの存在こそが大切なことだと気づかされます。私は、私の“運命”を今、形成しつつあるということなのでしょう。こうした私たちの行為／業は輪廻を決定する最も重要な要素で、このことについてダライ・ラマ 14 世は次のように説明しています。

生命は無限である。それには始まりもなければ終わりもない。よって、行為、カルマ（業）もまた始まりもなく、終わりもない。カルマは無限である。いわゆる無限大のカルマがあることになる。その無限大の無数のカルマのひとつひとつが、それぞれ新しい生命を生み出す力を秘めている。では、いったい、特定のある人物の、現世かあるいは前世かの、無限のカルマの中のどのカルマが、その人物の死の時点において、輪廻を決定する最も重要な、支配的なカルマとわかるのか。…その人物の死ぬ瞬間により近いほう、より時間的に遅く行われた行為から生じたカルマがより大きな意味を持つ。…より彼にとって馴染み深い行為であったかによって決定されなければならない。…誰かを憎み恨むような悪しき感情が、自分の死に際して自分自身の心の中に芽生え、育ったなら、一瞬にして、それまで集積してきたカルマの平衡は崩れ去る（同書、66～71 頁。ヒンドゥー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』は、「死に際して私（バガヴァッド／神）を思え」と繰り返し教えます。なぜなら、死に際の思いこそが大変に重要なことで、たとえ、生存中に悪い行いをしてきた者であっても最期の瞬間に神を思う心が生じれば、その者は“救い”に預かることにつながっていきます。神のもとに赴く、寂浄の心境に到達する等と説かれます）。

ところで、仏教で「生死」と訳されるサンスクリット語は、ジャーティ-マラナ (jāti-marāṇa) やサンサーラ (saṃsāra) で、「生まれることと死ぬること。また、いのちあるものが、生まれることと死を繰り返すことをも意味し、＜輪廻＞と同義に用いられる。それ故、＜生死輪廻＞＜生死流転＞などという表現も仏典には散見される」（中村元他編『岩波仏教辞典』第 2 版、2002 年）と説明されています。ここからも輪廻は単に死の恐怖を超克するというだけでなく、生死そのものであるということがわかります。ですから、死は生とセットとして考えられ、生きている私たちにとっては、どのような「行為／業」を心がけて行うかを教えることになっています。無明の中の輪廻の苦しみ、生死の繰り返しから脱することこそが、人にとっての目標であって、生死の苦の超克を目指すことが仏教の核心であることを考えれば、死の超克を図るための輪廻という死の認識は、いかに生きていくかに重点があるということになります。したがって、次にどのように生まれてくるかということは、いずれ、生死の輪から脱するための“要件”となってきます。

私たちは生きている以上、常に何かを思い、考え、話し、行動するという行為をしていますから、次の輪廻、次の生が「生死」からの離脱（解脱、涅槃）へと進んでいく生き方が必要となってきます。